

火災に遭った弥生時代の^{たてあな}竪穴住居

先月に引き続き、吉備浄化センター（下津野地区）における発掘調査の成果についてお伝えします。今回の発掘調査では、弥生時代の火災に遭った竪穴住居跡を確認したことが最も大きな成果です。旧吉備中学校校庭遺跡では、これまで弥生時代の竪穴住居跡を30棟確認していますが、火災に遭った住居跡を確認したのは初めてです。調査を進めてみると住居の床面上には焼けて炭化した^{たんか}垂木^{たるぎ}などの多数の建築部材や落下した建築部材によって押しつぶされた土器などが出土しました（写真上）。さらに住居の



炭化した建築部材

壁際には、炭化した建築部材の上に20cm程の厚さで土が盛り上がっており、火災の熱によって部分的に赤く変色していました（写真下）。検出状況から判断して、もともとは茅^{かや}などの草ぶき屋根の上に乗せていた土（屋根土）が、屋根を支える構造材が燃えて落ち込んだことにより住居の中に堆積したものと考えられます。このことから、この竪穴住居が土屋根構造の竪穴住居であったことが明らかになりました。

これまで日本の竪穴住居は、草ぶき屋根であるというのが一般的な考えで、史跡公園などの竪穴住居も大半が草ぶき屋根として復元されています。しかし近年、日本各地の火災に遭った竪穴住居跡の調査研究が進む中で、土屋根構造の竪穴住居が比較的多く存在したと考えられるようになってきました。和歌山県内において、これまで確認されている弥生時代の竪穴住居の中では、明らかに土屋根構造であったことを証明できる調査事例は確認されておらず、今回の調査は県内における竪穴住居の構造を知る上で貴重な発見であるといえます。



火災に遭った竪穴住居跡（復元直径約8m）